



竹窓玄玄大人遺意

蓬廬青々山人著
蕙齋紹真臨圖

書畫
精造

時代俳家奇人談 模画

江戸新版

文化十三丙子秋
彫刻出来

文生堂
慶元堂
仙鶴堂

刻俳家奇人談序

曩小閑田子近世畸人談集録一載て生出は詳り
方里来者何れといへども彼を此盛を繼るもの
竊り、惟みるに永正天文の比小守武宗鑑此清標
あり寛永正保名中より貞徳季吟の卓犖あり延
宝元禄の間小宗因桃青此逸群あり且金一福氏
貞室玄圃帝、社伝徳言此其南嶺富玄来文村支考
件六北枝燈犹来山鬼費乙由不角原松淡淡等此一
あひく生る小雅出する所の俳家も亦その人なりと

いふはるゝに茲は先人玄玄一遺稿ありに俳奇哉好む
者の為小輯す依る八十有餘該楚北要しとや古人
これ柳枝舉てあるを知し又各句に其風韻の姿
を識すふあり今也四里に題し之を俳家奇人談と
しふ後來若種客幸と瀋桶摸索北羅哉唱ずんハ僕
崔離伊るり是く如げふやや于省文化丙子年歲
初春蓬屋小筆を採依

儀伴閑人書



俳家奇人談序

倭歌者詞雅而俳句者詞俗也比之彼詩
與談者俗而叶音詩者雅而有韻固其
自然也余謂雅俗異其詞體裁遂別文質
已定而意趣亦互有優劣其感鬼神動人
情固同之若其詠之人意有雅俗而其發
言不同是故倭歌與詩固雅而詠有俗者
俳句與談固俗而發有雅者則雅與俗不

可以詞害其意也。竹內句當玄玄一者。所謂目雖盲不盲于心。而居常好俳句。其詠四時景象。言人事。喜戚閒適之趣。淡薄之味。往往使人有無限可感者。不為不多矣。纂而輯之。名曰詠物句選。云玄玄一嘗曰。古人之言俳句者不少。而欲尚友其人。則不可不知其意。匪事蹟也。於是乎廼撰有其美名佳句。而事之可以賞者。而遂成編。

名之曰俳家奇人談。其子再校而刻之。以繼其父之志。豈不懿哉。苟世之言俳句者。讀之辨。今古之文質。知意趣之雅俗。則有復裨益于風教。亦以為不少矣。古人有言。云誦其詩。讀其書。不知其人。而可乎。是以論其世。是尚友也。玄玄一其有感于此者。也乎。是為序。

文化乙亥秋九月既望

一日才に募て得る交名古画襖短尺出懐等並びて成人
紙書の筆を借依るも亦此れ旨意を解するの一助なり
也一や親る人それ諸我恩一

蓬廬青青識



俳家奇人談目次

上之卷

- | | |
|--------------|--------------|
| 一 宗祇法師 | 一 荒木田守武 |
| 一 山崎宗鑑 | 一 松永貞徳 |
| 一 杉田金一 附 英津女 | 一 野々口玄圃 附 醫水 |
| 一 松江重頼 附 春泥 | 一 高瀬栴盛 |
| 一 山本西武 | 一 鶏冠井令徳 |
| 一 安原貞室 附 元次 | 一 北村季吟 附 湖春 |
| 一 齋藤徳元 | 一 石田未得 附 未琢 |

一 高鳴玄札

附

山夕

一 荒木加友

一 半井卜養

附

慶友

一 池田正式

一 芳賀一晶

一 中島貞宜

附

二葉

一 神璽忠知

一 田代捨子

附

盤桂禪師

一 池西言水

一 西山宗因

一 井原西雀

一 椎本才磨

附

團水

一 田中常矩

附

常長

一 田代松意

附

正友

一 菅谷高政

一 伴友信德

一 上島鬼貫

一 園女

附

惟中

一 小西来山

附

由平

中之卷

一 松尾桃青

一 榎中其角

一 服部嵐雪

附

烈女

一 向井玄来

一 僧丈草

一 森川許六

一 東華坊

一 曲翠

附

破鏡

一 惟然坊

一 勾室

一 秋之坊

附

李東

一 磨工北枝

一 僧浪化

一 僧千那

一小川破笠

一路通

一梢風尼

一智月尼

附 乙州

一鯉屋杉風

一野坡

一越智越人

一涼菴

一曾良

一原田宇古

一知足一家

一生駒萬子

一山口素堂

下之卷

一中川乙由

一舍羅

一露川

一深川湖十

一高壁百里

附 琴風

一紀文親子

一秋色

一櫻井吏登

一水間沾德

一菊衣沾涼

附 行尚

一大院三子風

一古羽不角

一梅路

一大高子葉

一加茂原松

一桑岡貞佐

一松木淡淡

一堀内仙雀

一活井舊室

一清水超波

一 子曜巴人

一 横井也有

一 千代女

一 山口羅人

一 建初凍佈

一 遊女談

通計目次八十有六談

一 玄玄居士略傳 附 今世名家數句

佛家奇人談卷之上

竹窓玄玄一建初男 夢應寺主 參行

宗祇法師

宗祇法師さうけい法ほ沙さ松しょう年ねん名な比ひ奈な里り一いが猪苗代しなな代だい兼かね載さい小こ松しょうく連れん歌かの
おと我われ問もんまう一又また惜おしいう家け案あん十じゅう年ねん開ひらく連れん奇きの竹たけ年ねん此こゝ
功こうを積つめられたまふ妙めう小こ針はり里り雅みや一已い答こたふ便べんいはく猪しょうらバ十年じゅうねん
登のぼり動どうふ否いな如何いかんと兼かね載さい大だい一阿あ知ちまう我われが及およぶ所ところ又また阿あず
すと感かんせ一とや漢かん此こゝ相あひ如ごとくは十じゅう一て始はじめ孝かう經きやうを讀よむ
唐たうの高たか適たてハ六十はちじゅうふ一と初はじめてて詩し戎じゆう作さく成なりければ世よ變へんが連れん奇き
達たつを一と亦また宜よろふとほや亦また小こ侍しやう母ぼの鬼おに費ひも是こゝを稱なづけ一と
當時たうじ雙ふた方かたり已すでに祀まつせ玉たま或ある時とき近きん隣りんは難なん産さん阿あ里りる便べんちその
屋や又また信しんぐ一摩ま河か般若はんにや若わはらみ女をんなの奇き情じやうう家け宗そう祇ぎ一二いちにも海うみで

守武靈像者募往時所崇於

度會外宮之真而其門

葉之所傳也先乾什

素出其派嘗師會

難點止附與沾測

沾測授之雪齋

後莫知其所在后乾什

索求而得之云爲其古物可知也今取

以圖焉

蓬廬青青



世小「蒙」益我南望阿彌陀仏とゆふ一哉
いふふありて此句哉殊世ありと爲るものハ能ある子晋子隠
あめり天文十八年八月辛巳殊世歌「越」くこと又り末
神所山峯此雲風峯の松風綴句「招」顔小今日と云ん
我世如奈

山崎宗鑑

山崎宗鑑ハ近江守人本姓支那氏
長年より長享元年迄本言程上流を以て將軍義尚より
くら兵を帥く追討一勝利を得同く二年功より
肉大任小任せられ義隆と改む延徳元年義隆松山あり
して逆く豊後討つ支那氏廿五歳主従の別哉然み
致仕一利義一掃野元り勝は後一後殊別山崎此竹林

道遠素より和歌連なり不達一又倭儒も長ざり或時道遠院
殿（寶隆）宗長湛とも糸協とて乃ち一巻一ける烟葉をわ
て蘇里りふに吐瀉一と一不持てる姿を足まは跡鬼つと
と異じ玉ひる哉「おあんとすれど彼の沢水宗長」蛇一追生
字何れくるらん鑑が才三ふ里（案ずるに難後集倭語の解）田耕等
る哉町穿す滑智を平記を準據とせられバ滑智句をまれ生性のはら
志むる変り或人「尻毛を借し常とく」と為て附句銭金け
「水雪の尾羽れ寄けさ解く又切く」とある切多くもふ
といふるに三句而全せられ「盗銭者一て足まは我子
「け屋りある月銭かくせ旅家の枝」公の記的矢れ少一長
盤句はと古雅あり「手銭ついて歌あう」よる煙うか「摺小本
志ら旅家夢れ花はりり「傘を忘れば雨もおよ夜半花月

松永貞徳

松永貞徳ハ幼名瑞徳長ドても程野哉米収量振を忘一旬ら
喉で延張九は多長延ねともいへり道遠軒と号す冷小和奇連
成好く玄旨法下を少り長唄子成衣より一年世得兼好が
徳持妙を三條の大話又講す活り此家何家ある者との言鉄
小振一て今名を異の地を寄附に昔より社何のへ何ち家
非此あるる成さるは便ちを琴書成茲又振すを名異人あ

四



まゝくはつらつ句を備す爰はめて思へらく神託に我を
起すべしと爰小松く小祠を結構し之に開福祠と奉稱す
賀河比奇「萬代をまの社の春秋と云ふは家方れ云はれ紫雲
乃そ此年の秋 云頂より燃指堂の本此稱を許せられ初と云
嬌忠忠我あふはして此年と名く天子此年と云ふは一七七一合する年なりと
おのゝ風流しと可なり進利する所海物
白雲の附臨時入らるの響く是小傍於す時より武成定より始
附合興り何より一寛永六年あり今主ハ西武よて秋重因如月能
道長令使執筆と七人あり附合綴句満と正潔なり「睦月と云
いづれ始の時一餅らせく貴い立よ云云西「雲月花一夜と云
るぎりふ一人の雲と此種や秋忠月「冬あり里と樓まで穴
映り夫明の後に重三人あり秋重満足親善と云く年長トて
秋重ハ僧と成里満足と執筆とあり親善ハ里と成成と云はれ又

可第の從なる里何まの年と有けんありて竟然親王
大佛殿此南才許多を湯とくみ月う果樹茂極名
榜をかりて材と名く中「報恩義あり納るに妙經
今部の子昇茂以す我あり六奇仙上宮お子達磨大少人の費と云
は或定家等の六人あり
像を画くあり吟詠所あり詩奇進能忠短尺を集む直
小芦此丸屋葉屋を以て名に通に方城東西數十百南北三十
百葉屋を以て名に今圖あり字を撰根を存
せり金権貴小幸せらるるとは此翁の碩徳あり承應二
年小松は嘉八十三辭世の中「翌日ハ初と云ふなりい
今ハ初と云ふなりい今ハ初と云ふなりい今ハ初と云ふなりい
能成綴起す羅山草山の末子を以てつ人と云はれ且南
重村貞富西武樹成令使季吟使久末清玄これ一書安靜宗

時乃松隈定重等み家宗臣なり鳴呼盛を傳ふ家

松田重一 附 美津め

松田勾當重一と勢陽神跡山北林藤一居せり生性十二津の
調子成強く木の善惡を伝ふ形或得たりといふ我朝の
曠も種一つ屋一懐抱又身武が能風を慕ひ逆我位する
在にが如く老後乃一貞使の濡削を乞ふと云ふと云ふ
殊又又えらるゝ「嘆きの足る足る」の在香うか「其れこれ」
身とが系松鶴「ねむり」の當務や園の布思はけりき此時
小して是妙何んとい寛く水七年六月八十三歳一七死
つ人美津めと同玉山田松本忠貞が妻一て能清忠妙子なり
「鳴呼ええ」何れ松田「右を」り志水ぬ藤れ手先かを
つより松坂の重めを伝ふ

野に立圃

附 美津水

野に立圃初名いし重信姓離居市を傳ふ松常居鳥丸家の
此松より近く平生お入して睦和奇忠なりも又つさいれ里
その時松より虫法を傳へ里時探幽より画別成地よりを
ういひが長ずる所なり「富足」の才子あり「八」の松を
松田重一「水」や汗も傳ふも又松「山」堀と傳ふの松や立圃
「松」より「さ」を伝ふ松田重一「山」堀と傳ふの松や立圃
を傳ふも「山」堀と傳ふの松や立圃を傳ふも「山」堀と傳ふ
くは松田重一「山」堀と傳ふの松や立圃を傳ふも「山」堀
世「月」松の三句同を伝ふ松田重一「山」堀と傳ふの松
また松田重一「山」堀と傳ふの松や立圃を傳ふも「山」堀
みや魚千里「山」堀と傳ふの松や立圃を傳ふも「山」堀

後川稻葉うゑ「初づり」習俗染や千草通ふ沙衣を縫ふ
能得新式を著つて享保十八年小死す

松江重粒 附書後

松江重粒俗名大文字屋治右衛門能名維新といふ父孫小通を傳
習にそ風格ありと立圍と修伴すべし一彼輩とて慈想を抄する
茶もぐさ「吐礼の持ばうをゆく復體うゑ」秋やけさ一足又知像
拭い極「料理河里殘ふ冬ふ」極と成なり此子生得後意
同つて交を絶ふと教多ふ少寛永の頃うゑよ布子集を撰す
同時立甫「管ふを河里せなり此冬うゑといへる句我加入せん
我粒む粒沙の句「管ふを河里せなり」と同條なればと交うゑに甫沙の句
沙の句ふ沙の句「管ふを河里せなり」進られけきとも遠く
件あるは是れ依り「沙の句」此初み姑く経より粒返り此を恨そ

他日甫我害せんといへる沙の句は水を吸く體才なく甫をも動
端せり又毛吹け我作れる時影山の西式とも矛盾なれよぶ事
あり又武治又父室亡母の退牌又「禁々」此は舊く此れ佛の意と
いふ句我をせりも此粒は水を吸く體才なく甫をも動
室が裏の壁を「影影」目まけ我をてやはなむけといへば
けみりる室沙を吸く「退火」は身此の式の大文字といへば
此句前表に載し「や沙の句」もよく身保りぬ延宝八年廿
十四歳あり

書本裏瀧ハ初め重粒の門下として後久松此子と名を承成り
粒のつ法より重粒重才重好市欠何り是我に重といふは長
瀧の列は入る我粒に粒ゆるはず瀧は水を吸く體才なく甫をも動
つて久松又屬より「奈良法沙葉葉つむ」や此小粒「懐め

白くは

家老の

お

お

お

お

お

お

有けせ七十三歳——死せり辞せ「世の暇くを」
云くや浄土

鶴冠井令徳

鶴冠井良徳の京師名人地隣唐と号は後、尚今天子
人より十二代此法律を導く令徳と改む「但此江の波此波や松
嶺子」稲妻のねとけりてや夜這星「神塚名纏り杉葉の
音うらうら」令羽音打拂ふ神もな——或時伴歩君守
武又倣く獨吟ふ句成るに沙路と源くを才を感ぜり
延宝七年九十一此壽を終る家督は波集り「良祝と有
て」歌手い何ちて成するう山此に良忠と何月と「冬てとい
此三禁やふえ依今日の表と良徳が後り」記すハ思くる
生一つなる屋——

あ系良室

附元源

あ系良室初名正室一囊軒と号は此奥巧小能奇を源
且徳義と達すあり沙の歌賦也又美なり和室重彩
出水を瑤むる音——句記此又いはいはく我幼より良
訓は——今又糾く廿九年此良人見片——のく廿六年と
生免降成文——財沙此綴句「天長くちをとむるや秋
此月といつる小源——志まんの益良文秀と綴——た里
子古風中に在く稍とまの端成るくあ——て是ハく名
作の後代まで人耳成車轉る世又傳ふ室芽形小源く此
句を記し「好業東江——又二句成るす「いけ堂れ暖家
此離食小源——」記此月のみり——壁の雲——や良士乃
書く「く」記此我記しとあり——此三事成存——て餘

寶壽 印



是乃
石臼里
乃山

芳山題咏
不能入
此妙境

新在り家宗は作を續で増山北井茂撰に雅客み家宗一
依る宝永二年八十八忠年壽を終ふ

鬼淵表こそ小奇掌而小古縁花果院と号に後生畏るる一
此子の風格厚く好家小海片縁「蝶輕」一はる若拙を云ひ哉
「名」の附ぬ和加たゆ一山機「目」は氣北附ぬ松何里揚院「天地
れ由とてゆる時致るふ元禄十年父又先づつて死に五十有
餘歳をむむ一

新後徳元

新後氏ハ渡所波集妙人ものと徳因伝秀小坊小伝秀石因一
當一級するに及ぶ己も亦長良河を渡り通利勢一て
徳元と改名一帳言己号に初免和奇我指南一て江戸佐樂
御小位せり一年と京一と入る即ち百歳興り何一「京

田舎おとばの巻巻幾めぐり名籍「育うらおと能れうびす徳元
「蝶の舞」後我妙通又獨吟千句をねく名を
人々知らはる宝永中室粒物子集を撰するの時秀逸なりと
巻附小一「句」妻「月」や小月人同出「松」の松邊「一世」の作
者と稱せり「大和」も「屋」もといふ「物」を此「里」何と云くも
書やど云起掲りな「著」す取初抄何り江に於て能出を梓
するは是哉姑くは若別小控く妙す梓世「今」はで「生」多「入る」を
月夜うかき大空輝の文小橋水り回く知化如夢如影如氷月と妙
京縁うか

石田未得 附未得

石田又たつ江戸妙人「家」智所小位せり何なるかや云くお
妙は「得る」幾種もたゞ「再」江戸「来」王「移」を「下」く名を未得

と改め徳元玄れと更りと系して重粒を徳と稱み遜又刻つ
ふの乾葉と号に「葉子やうふ香をむるち」の表「記」を
て藤らまぬ伽又すみ空うか尚時句作の伴に玄れのとより云
掛けト客ハ口松子よりうま立甫と公附を寄り「此人をあの
字を名成く」我松あ又屋座と額向ハ區區なれども雪清
替ハ皆缺あとち「寛文九年七月八十有餘」て死に
男未孫父の業を継ぐ良葉と号に「河高北時あの方や屋形
系傳と狂奇をも能く」つ人多うう」といふ天和二年三月
此世我玄傳

高鳴玄れ 附 凶夕

高鳴玄れと張河山田の産和奇我牡丹意き人うまび能傳をバ
名存不傳つる世の世此末年江戸へ来く醫術をきり「そ傍ら

能傳をおしゆに性もと非獨りて世のふ跡一ある秘紀
友とち伝云「て吾業より能傳れくと傍らなど申し
けること四十二の表よある「守りむ」今年ハ座く「十二
神或人探函がゑ士を給此契我乞るに「名をえ」や此
あううゑ士を寄うつ「又「咲」のうほどめで友物と伝
「香の何うが身臭か」ん寄れ登時ふ尚く云掛の妙手と名
立「と宣ふはうか一年瘡を病るるに自ら瘡すれども
功我奏せに数日引込居ゑり「うんは好る居られん」
を消すはるにとそ獨吟れ百韻忘るふふを和句「卯の雪
落るハ風のたこ里うか」いざ悪焼せん松字と此附句祈禱
「や成りりり雪種い一つ」うんはふけり或と記連中る款
一書持来里點せんり我和む下速車「て世に廿日ばり

いふ出我業して空作の何屋まり我毎トうり粒僧人喫て大
 了怒り直ふ果一柿を附うり式是又驚起粒が公をぢぐけめ
 強く居みりる時人その柔弱なるを識取者多う里一申めを
 主持てる身れ猥里ふるける我稀美を極も有しごと又狂奇
 をまけり句らの奇合部面そ何り作名して平野實材布取
 因送二人とせ至今に於て海行する狂奇者海後古の狂名も是
 皆そや様とふあらん

荒木加友

荒木恭齋醫術を以て江戸板橋町ぬすろ至一年上原て
 欠つゝのり狂名我加友といふ寛文中此人たり生句お厚く
 尺に今人けり一砂りるる上我下えいさう山の麓を家それ
 年高きとあらば同時書抄又同名の仇士高う書陽郭
 加友といふ言句高き一が才子なり

中井ト義 附 夢友

中井ト義子と寛文の頃名は西沙に法眼又釋をせり
 和学に通じ狂奇を能に初め宦途を揚々く鉄砲洲の地面
 押領當時ト義の本居こころを思ひしうみち我えりし外種あ
 るべし又狂信をまけんで欠解又偏あぶ「改筆の法夢友秘の
 天下うか」表し月己空やゆめげれうくくら

夢友一晶

夢友一晶ハ系沙此人はトめ狂信を信徳又偏まび後又信
 此つ下所属す「初日」か光里うて居く後山「經」ハあり其う
 母の登ぬるか耳うゆく所よまをゆれた時ぬるか「松系」飛

江戸妙子
 小外料
 分のちと
 うふ作

まゝあつた

しる

しる



しる



勝ちいけし一客名譽晚年を種が崑山の市戎傳りくく江
戸へ来里冥靈堂と号す宝永四年正月六十有餘歳
一て死せり

中鴻貞宣 附二禁

中鴻貞宣の蝶と子と号に又名を新紅禁新とも稱せり初め
季吟小波ふんで後より貞宣に倚る夢治中江戸浪浪橋あま
住せり「目此本や秋津すごちの」と里北年「既雪是福つ」
包むや雪の及或時吟使名伴へ「きけ復れ季吟は依り
蝶の超えて福里のふ」又るも「福和庭あ」の松と吟使名
せり「しる」も何事
禁あゝ能情を好む一年元月「死ぬ」といふ生る苦ありふくの
はる上の又文字禁且も「おた」とき字を福を初句由り云

威ふるハ手極ちりこそ其に保長矣一たり

神璽忠知

神璽忠知と江戸市人俗稱長三市承應の江村坂裏津が能譜
城はあふ「元日や何又喻ん移り事」何んつゝ奴小女手の藝
うふ又「必居や屋」奴昔の言れ枝木の秀保より白炭忠知
嘆息せし其其角が難詮集といはく必居と云え「忠知が素
月や何んいふ身身の難法妙と辯せし後切り何ぞ浮世
といふ云々」云々表なりと

西山宗因

西山次市寺一も素肥後別加後家名居たり家傳ふ江村坂の初
蓮奇を昌孫はあんで宗溫守武の風流被さるふ天性奇才
何れも「何れも進むる名小越」云々其永中主家性轉るなり何

里々玉を玄少竊り能返ふ我よせ欠風我感破して一派北
始祖と系係難解して宗因と改名一其のわ野は函棲一被て
難波の天満より居に在り「梅存と稱せり無我忘吾と号」一
を向榮といふ此翁重粒と交り深なり鬼妻が筆記は具なり
小梅翁重粒を妙と云ふといふる能なり其其に重粒は翁と云ふ其の後里村あひて
蓮奇を昌孫はあんで宗溫守武の風流被さるふ天性奇才
何れも「何れも進むる名小越」云々其永中主家性轉るなり何
我唱初りも小折其世更の下向何よりを述く江戸十百韻を興
して乃我弘む生書院小梅翁「けし」の室小後林北本何り梅のな
時一奥別岩本の城主風虎露沾北二公妙つ又入玉いて上子の受
あま一あまの源流はすく弘す里一こや或日市村竹く度芝
居尺物に何れも「何れも進むる名小越」云々其永中主家性轉るなり何
何れも「何れも進むる名小越」云々其永中主家性轉るなり何

方圓相撲大

時をかくかくしに外との
せりそこの切なみ恒根卯れ花
風よりそきき一程を我者よ
雲よりみてい廻又乃状
取より火打竹筆月
鏡すそけつからき書の秋
さきより経てもある飛空
遠路を歩かてき方もある
歌より河波より一廻向れ経

泥柱のちきり風よなひく
同柱をいさむらん毎に松
うん溪流して環柱はひ
は世彩ひ柱もかく柱あるふれ
大河より船海より石橋
礼讃や柵 みるせさから
無火焼てあ図る乃橋
若れをい十八ヶ所おきり
疎路乃園入柱おの秋か
水崎れをををのきり

さうなるはうと浦より橋
斜れを渡るきり友も
きりきりきりきりきり
うつりきりきりきり
たつせりきりきりきり
木ぬれきりきりきり
ゆりきりきりきり
花乃橋耳よあつてきり
風のけれきりきり
先イロハ布目きりきり

さきより眼より南柱とて
腰よりきりきりきり
腰血よりきりきり
小次郎腰よりきり
世より銀柱よりきり
柱よりきりきりきり
おきりきりきり
腰よりきりきり
長六
梅

字我^{まさ}と云うぬ梅^{うめ}梅^{うめ}小^こ竈^{くわ}ひるにおやくと冠^{かん}すーと教^{しやう}
ける後^{あと}了^{りやう}蕉^{せう}梅^{めい}此^こ多^たを才^{さい}子^しと申^{まを}て生^き才^{さい}我^が梅^{めい}竈^{くわ}
ありありと一代^{いちだい}此^こ名^な句^くといふに云^い竈^{くわ}や才^{さい}子^しなるを
取^と許^{もと}ふも此^こ什^し古^こ今^{こん}小^こ才^{さい}一^{いち}と伴^{ばん}せり又^{また}新^{しん}表^{へい}の法^{はふ}表^{へい}た
き云^いうふ一^{いち}世^よ此^こ中^{ちゆう}や蝶^{てつ}くとはま彩^{さい}も阿^あれ「梅^{うめ}坊^{ぼう}ややい
此^こ厚^{こう}里^り紙^し帳^{ちやう}」有^あ胆^{たん}の波^はを殘^{のこ}る松^{しょう}鶴^{かく}此^こ句^くをとり卓^{たく}然^{ぜん}と
是^い辨^{べん}なり余^よ按^{あん}ずる小^こ史^し記^き忠^{ちゆう}臣^{しん}了^{りやう}滑稽^{くわき}の俳^{はい}諧^{かい}の如^{ごと}く
云^いふくろの戲^{けい}云^い我^がいひて人^{ひと}を怪^{あや}む世^よ世^よ此^こ人^{ひと}又^{また}加^か方^{ほう}ふ意^い
なり是^こ古^こ此^こ翁^{おう}若^に俳^{はい}諧^{かい}おはつる此^こ場^ば小^こ暇^{じふ}里^りとにほれ
古今^{ここん}小^こ俳^{はい}諧^{かい}の上^{うへ}手^てといふを難^{なん}波^はの宗^{そう}因^{いん}と伴^{ばん}賀^が此^こ梅^{めい}書^{しよ}亦^{また}
らでハちと云^い傳^{でん}ふ天^{てん}和^わ二^に年^{ねん}武^ぶ部^ぶの宿^{しゆく}舎^{しゃ}又^{また}双^{さう}す江^{かう}年^{ねん}七^{しち}
十^{じふ}有^{いう}ハ

井原西窓

井原西窓の梅^{うめ}梅^{うめ}のつりーと大^{だい}坂^{さか}林^{りん}君^{くん}一人^{ひとり}あり一日^{いちにち}後^{あと}
吉^{きち}此^こ社^{しゃ}院^{いん}小^こ松^{しょう}梅^{めい}吟^{ぎん}二^に条^{じょう}三^{さん}十^{じふ}句^くを吟^{ぎん}く生^きあり二^に条^{じょう}又^{また}
二^に条^{じょう}梅^{めい}と稱^{しょう}せし松^{しょう}梅^{めい}新^{しん}と号^{ごう}は「我^{わが}意^いの月^{げつ}梅^{めい}もは
ぞ初^{はつ}度^ど」平^{へい}松^{しょう}や手^てふく生^きるも意^いん河^か「長^{ちやう}持^ぢは去^さうくれ
ゆく衣^いぐ人^{ひと}」鯛^{たい}の意^いも又^{また}奴^{やつ}里^りと阿^あ里^り今^{こん}月^{げつ}「大^{だい}崎^{さき}の定^{ぢやう}ま
記^き世^よの定^{ぢやう}ま此^こ人^{ひと}ありと云^い学^{がく}我^が吟^{ぎん}く吟^{ぎん}る生^き才^{さい}子^し人^{ひと}名^なの
かよあると云^い才^{さい}子^し著^{しやく}す而^{しか}小^こ夜^や嵐^{らん}一^{いち}代^{だい}男^{なん}著^{しやく}す此^こ紙^し後^ご世^{せい}ー
引^ひつる近代^{けんだい}戲^げ作^{さく}者^{しや}の逸^{いつ}才^{さい}小^こ松^{しょう}梅^{めい}吟^{ぎん}く此^こ門^{もん}といふと
いひ傳^{でん}ふ云^い孫^{そん}中^{ちゆう}小^こ松^{しょう}梅^{めい}吟^{ぎん}く十^{じふ}條^{じょう}案^{あん}

推本才磨 附 墨本

推本才磨の才^{さい}字^じハ才^{さい}流^{りゆう}連^{れん}才^{さい}人^{じん}高^{かう}梅^{めい}新^{しん}と稱^{しょう}すはドめ西^{せい}武^ぶグフ

行くく刈武といへる西産が才子うり一時の西丸ある西産
とち梅子の妻を更てより才磨と改より「思ひおく梅子つ
り」起梅うあ「梅子香又文ゆく笛や」曹子「ねあう」は
て望ま「義うあ」香木立いうるや山の唯住居いづれ
年ふり有けん江戸へ来り「身は隠れ又山を買より」といへる
附句「ち里村の能宗浪遊をとりみ此我難ざり」と更て思へ
浪遊い此は名大家能るに買山此ある知るは江戸名能
忍るにぬらばと生年の夢「又」又士を我買くをぬり
こ「此常浪遊人ばと」鬼や南の年を月う「や常の又士
とて」過我改とをうやいと程程といふは「後庭里
版りえ又中八十二歳」て死あり

此條園中才磨がつ子「と」必眼居士と号は生涯法を

宗ん「阮籍の操を守協」つとと山常ある徳月「浩
幸」も編笠ぬぐぬ桑山子「八和や町小」徳のをりつ
宝永八年より此祥世「ね」ろく引る「徳の月」

園中常矩 附長

園中常矩の系記名人「と」号は中村相良のつあり「
季」住年愛風「て」一海を立川時と号に「徳林をこ
ちふる者」大徳此人の徳「いづる」といふ一年五百額巻頭
「徳」も「徳」の徳や「徳」此常と徳「て」徳「徳」徳と称する
又「徳」此三千の林徳徳色あり

父常長「と」風波あり「と」南門「て」松風影と号は「秋の杖よ
ハ里」果や「徳」林本徳といふは「徳」此人の徳「ちり」は
我「徳」み「徳」く子とせり

因代松意 附 四友

因代松意は江戸の人延宝中親治郎と位して友人四友と名を合
せ松林軒と号し全調日く小変化一字の勸一句は餘隙了
宛人を勤候む是れ松林軒と名く「癖くや香子の
若者松林軒」言や昔より人海に寄るの江の風より
づれに皆人傑惜この云々——是れの子と四友が功なりお前
梅箱の束りする小遇くす小後く十百韻等を棒に候け
江戸松林軒うんふり——己奈堂

四友と伴歩け人松園至つが才なる延宝の江戸へ来り松意
己力成合せり其後成廣む入おの隆安つけぬ意もが家

菅谷言政

菅谷言政も京洛の人何水のつゝ遊ぶるをきくは同時江戸

小て盛んは松林軒に在るこまお水も其の對して「末志者
れす武家の熱本すと幾句して句ら熱本とす道松言政
と名けりある古風者傑士と筆端おもく「松家」小代の松
かばせり聲の神くぐら「松」人小桶は泥鰌さぐりみ又一風
家と稱しつ居し

池西言水

池西言水の京師の産る松林風云れより出づ家傳りて京
後朝すこ風下雲と号し元禄中名田才お震ふを云はる
と「本松の果々河里より海客者語盡而意不盡可謂至妙
是よりして本松の云水と号けりも其の云「虎」り目校ハを
江の山より「尾寺」唯業此の云る「子知はる良の柳」
伐りより「文」す「虎」附けり「松」云「虎」く「虎」人ふり「虎」

お禁「火北彩や人にて津に現代も変態不二大手可知後江人
来く江戸新茶を著し福をく清く保く却曲集代撰ぶ享
保七年九月七十有とくく終るつ人今後一本枝の句我
以く墓碑ふ記すといふ

伊家伝徳

伊家伝徳初名宗肖村材園と号に系流し居て和及我
思等と日夜お念し一と懺り我修するより化り方といふ
或日東武電意席より文虫を繕く上野の風作いんを学ふ
おる友人教習と銘で酒数斗はあふ興ふ余一一句を作て
以く答ふ一雨此月やつけくけりけつばとて予知ぬる
「西士に流る三月七日八日ふあふ今題芙蓉作無出此篇右者可
稱通海」名月や今おるはるる子と何ん晋子はいくいけよいの

伊や人北世の中といへる観念り是の今年就中揚先郎と
白氏の年を然るるんも叶いて老の味を味ふ一と云ふと
り至氣さきさきの林うあ「照書て大相うはる」神々月「思
や女忠眼鏡しこれ書みあはく備す」一或虫ふいふはの子
幼ある時欠箱は具中箱の力をを記し一洋す小徳れ一字を
以ては箱双して後の西武村書は後々学ぶ或は「一向
盛成沙にせり」中年志づく後林の徳は興して沙父忠
作を愛は晩年眼を異いて正風は帰するところん享保七年
十一月六十有録して致は

伊家 附 燈中

伊家め沙村材園の人生活相奇を好て風流有り能徳ま
異津め成沙「一と生佳境」へる「お河」や左衛門の

伊家奇人談
卷之上
十五

伊家奇人談
卷之上
十五

伊家奇人談
卷之上
十六

伊家奇人談
卷之上
十六

横轡同時晉子が山の茶の亭と異曲同工不知何先手を止めて
折ゆくまの葉亦くあら一石とあふ勢をぶらる異ろくあ有種
此伴達をぞて紙子くある是皆女流の興象はく稱すべく
帷中に我あく流急は移る此にもに初て生妻とある
或時意解初移て来ると嘆すふら後振く客意す解す
手めが殺恭くく礼何を感んどて一必榮や目を立くるる
塵もちや手め振くて一我禁ふあ我流は初月を思ふ又死て
より東武へ下里移り隨從す寂寂と後へ又晉子は依り
後あぶ一年旅ちく系流を過速く渡に戸へ還里深川は在
恒て眼科を明く君の聲とは友人琴風が記いたく此女む
くより世事に迷く被下窓我強切く下弦の意緒を聞く
張文庫に蓋我る水奈るくふ用るちんと特に思はれくくと也

また此ろも風雅のうん此興を至りしを知は佛道のくく
天窓此冬と水どき中を十節ばり残を極も可寄く是
ハ唯一思むく我返る成度一初の如き若ゆ人理も恨及せ
せしや句ら雲虎和尚は答を出すも
東出の類指ん中の不求主不求忘の大及若根源強をおず
亦而將ふく疎くはい心源強よとての不恒柳を極り在ハ
我お唯ぞの後て若ふ句をいひ言我繼く遊中のるりもも
世益此に業ちは一切種も世益の口業よて法身我知
嫌はく我平白若のい念仏と句と奇とちり極小人知をも
や地獄へ落るの目出く和玉歌一自己念具不覓心清
燈已耀一燈心中默く有明鏡全識入明清淨心強く人強
く知度知有く何ふに世ふもあらぬ法此ぞの一也

空才さいき集しふすく此このの如ごとく一ひとと享祿八年六十集しふして名成知曉
 と改め冠里公おんりこうの母若わかく仕つかへ同どうく十一年四月六十有ありて
 死しに辞こと世よ秋あきは月つき去さの曙あけぼの一ひと官くわんの愛あいり現あらるふむあまり孫そ地ぢは
 國くに西にし氏しのあまたの倭わあまた人ひとはトぬ金かねつゝ学がくぐつ有ありとのひ後梅海
 小こ從よりてより隆たか中なかつと改あらむ一いち晴軒はるけんと号なづす「いふ名なや松まつ又またはト免めん之
 妻つまは月つき「とく教しゆくあるる人ひと改あらせ山さん樞しゆ部ぶとせ極きよく仍なほ復また了し遠とほく
 常おとこ古ふる一ひといまとこ振ふふる衣きぐく壯さう年ねんより醫いを業けつとて難波なみ又
 遷うつ居ゐり又また出いて能すべくすて名な成なりふふや之これ孫そ又また改あらに

上清鬼書

上うへの惣そう多た少せうの掬くめめの計けい料りょうを以もつて浪なみだ費ひ又また迷まよふ家け多たし
資し用ようふ之これ一ひと或ある人ひとその一ひと女にょ城じやう権けん貴きけ妻つま又また妾めかけんる城じやうすむ義ぎ
者ものを固くわ釋しやくす生せい性せいの嚴げん正せいなる古ふる率ひそ初はつの如ごとく一ひと統とうる城じやう或ある也なり

意つ海邊と悪事をけりや死又たふ亡沙君法會を財ぐふと
 いふの大いな依妄説あり考すべし 龍潜を重杉と海ふんで
 鬼黄といふえ縁京保北百束山と唐新して名才又咬ゆ
 或財縁云成一回せり水く「唐あふふく喝くく山菜うふ是端
 的機縁何賦福樹子く信衣のふを」油片ー油片ーく寐ぬ衣
 然情默面「復いふくをく唐ぢやと云れり」ふよりほ里と秋の
 空を依ふふ士此山此句雄澤侍事青蓮風骨「夕立の又や何変
 下結はう重」新水の捨取ち「出たる声」麦の所や妹が湯を
 類くふ里「扱すごや何ふ面白此飯を天性飄蕩くして漉漉く
 隔らば人ふ又詠強するる知ぬだー其はトめ句記ーていそ
 已二十ふ滿げるは先沙松江の寂と梅霜別をの令ふおるるー
 「ちよと足ふハ近れもまー有壁山といふあふふ」襦に瓢を下て

ぬらうと蹴り執筆より吉野山と執るのありやと答られ
尚然て吉野山の雲は祇といふ執多津はくたたり
りといふ吉野のりといふ是いつは里といふ云ふが名をいふ
くは彼玄旨法中より劣らぬ才力感ずるに録あり拙は此子
業成る業成下その御書を建てるなり一宜あるうふ伴舟
此元祖とある我一年紙の教習して蕉翁の形抄するに遂て
「何さく拙と知れはる」一神おく里晩年囁く聖居士即
稱さる元文三年小徳庵

小西東山 附里年

小西東山ありと法号といふ素鬼の聲少くより父母
親旅れなる養育せしはるなり化す我勤めず只出我清まを
好む時一里年清くして我子とちるに其教あるをいふ

十代徳庵といふ二十ありに事をまて同家とある十
代と号す中禁徳林の翻楚して古今より名代は一人
「元月やはれは野川に水の音興家園美」三味線も小
らば梅若菜精確「む」つていむつてい捨はる此園めう
此竹は水と及ぶに「雲」く死ともないが病うふ清玄
川や竹で足ふく時あり「涼」ふに橋を川に渡り二万
可稱合作「子」ぬれく「性」ひる月あり嘯山いはく林間一
微雨時来此時是景可想「雨」ふに秋の姿や灯を狂ひ金
鐸「松」は校「柳」はつ「たり」来興自在「初」は
何さくふ秋と成みり里嘯山いさく以温雅く調寓悲憤
思果為傑作「我」ぬれ「我」ぬれ「何」げく「る」る
女人形の記すふ杉もも此句あり

尺はより登りて探息ふかた所今高松十萬里より秘す所
 とし蓋し西宿舊値より多々ち里といへども此處が奇正
 して古今探踪す所が如く及ぶす要するに西山の一流
 此人出てより後世より大威をりるるべし
 前川田平と梅翁のつ子として東山が所より歴年親みて
 自入と改むる作多く尺に「吟や三石此月はく今日の海」山姥
 がふらぬ山や雲は累々室永中津の玉如珠と及に

能登高八張書く上終

